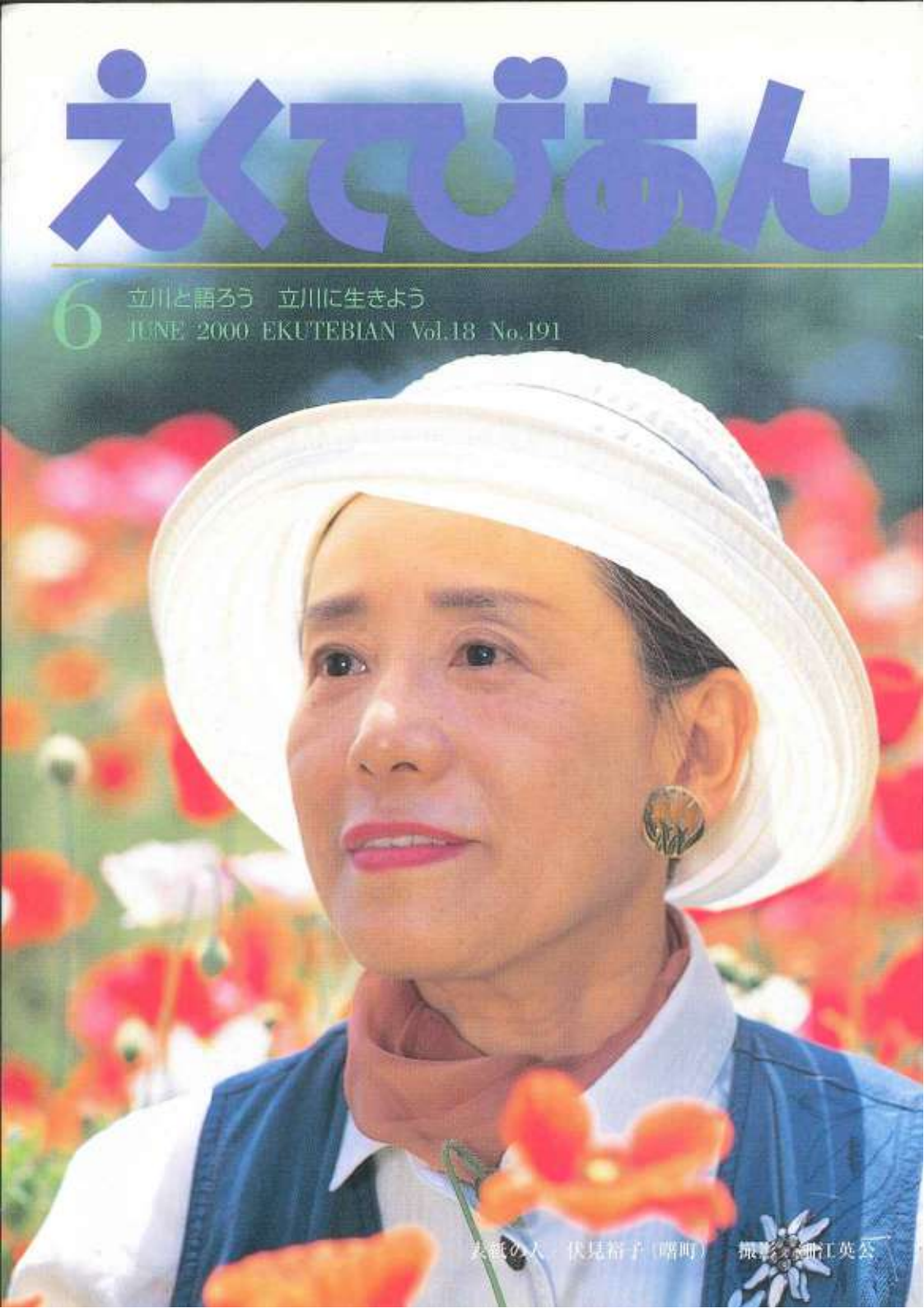
えくてびあん

6

立川と語ろう　立川に生きよう

JUNE 2000 EKUTEBIAN Vol.18 No.191



美観の人　伏見裕子（曙町）　撮影：[illegible]江英公

たちかわ名木伝 五

【桑】

案内人・鈴木功

所在地：都営立川柴崎二丁目アパート西側（柴崎町２丁目）

立川の養蚕は江戸時代中頃から始められ、昭和の中頃までは農家の主要な産業として発展した。また養蚕とともに、砂川地域では、良い品種の桑苗の生産も盛んに行われ全国にその名を広めてきた。万延元年（一八六〇）、阿豆佐味天神社の境内に蚕影神社が勧請され、養蚕農家の信仰をいっそう深めていった。

明治三十年代から大正にかけて立川には養蚕に関する東京府の施設が開設された。蚕業取締所や原蚕種製造所が開庁。後に蚕業試験場となり技術的な進歩を遂げ、多摩地域の養蚕業は一段と発展していった。

その施設のあった所、柴崎町二丁目にそれを象徴する記念碑と、記念樹のクワの名木が植えられている。高さは約十五メートル、太さ五十五センチで、魯桑（ろそう）の名があり中国原産の大型桑、クワの原種ともいわれている木だ。立川にとって歴史的にも大変貴重な存在である。

クワは四～五月頃に花が咲き、六～七月には赤又は黒紫色の実を結ぶ。この辺りではその実をドドメと呼び、甘酸っぱい味で子供たちが喜んで食べたが、たくさん食べて舌や唇が紫色に染まったところを親に見られ、よく叱られたものだった。

【クワ】

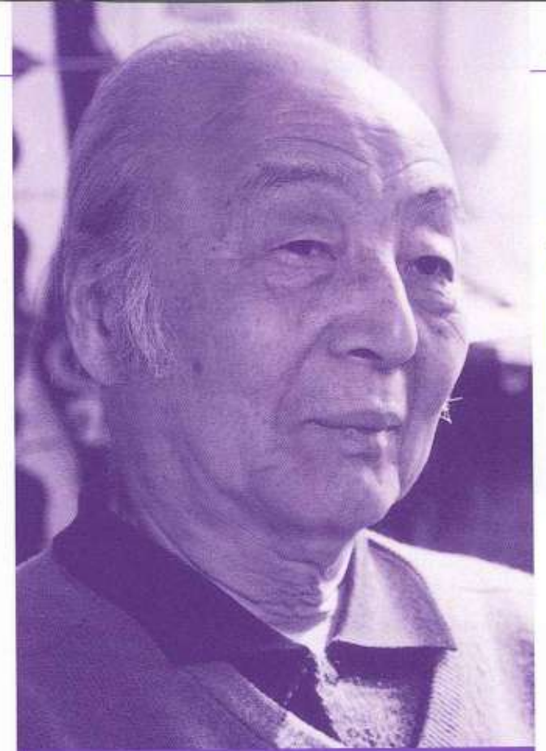
学名：Morus、食桑（くうは）、蚕桑（こば）などが転訛してその名がある。古くから養蚕用に栽培され、葉や実には多くの薬効作用が認められている。

桑の実や風をたぐりし母の郷

石塚孝江

運命が僕に描かせ続ける「宇宙の軌跡」

日本画家 佐藤多持さん



■佐藤多持（さとうたもつ）／日本画家。昭和第一学園高校の教師を長くしながら制作を続け、ライフワークの「水芭蕉曼陀羅」など戦後抽象日本画を代表する作家として知られる。池田20世紀美術館、青梅市立美術館での大規模個展のほか多くの美術展に出品。昨年中国・上海中国画院美術館で個展が開かれた。「たちかわアートギャラリー展」審査員長をつとめるなど立川の美術活動にも貢献。6月5日から銀座・文藝春秋画廊、10月28日から立川・ルミネギャラリーで『画友会』展も。
■芳賀敏博（はがとしひろ）／えくてびあん編集人

芳賀　ご実家は現在も国分寺市にある名刹・観音寺ですが、小学校は現在の立川第二小学校で、第一期生だそうですね。

佐藤　最初は家の近くの国分小学校西分教場というところに入ったんだけど、ここは四年生までしかないんですよ。それで五年生になったときに、立川第一尋常小学校（現第二小学校）に転校しました。国分寺の本校へ通うより立川の方がずっと近かったんです。

芳賀　立川とはそれ以来のご縁になるわけですが、その後、明星中学から東京美術学校（現東京芸術大学）の日本画科に進まれ昭和十六年に卒業されています。戦争のまっただなかですから、絵どころじゃない時代ですよね。

佐藤　真珠湾攻撃のすぐ後、十六年十二月に第一回の繰り上げ卒業になり、翌年二月一日に陸軍麻布三連隊に入隊しました。ところがすぐに演習中の怪我がもとで右手に黴菌が入り、手や腕が二倍くらいに腫れあがってしまったんです。陸軍病院に入院して肘から切断するはずが、後回しにされているうちに「切開すれば大丈夫かな」となって切断をまぬがれ、駒沢の陸軍第二病院に移された。これが運命の分かれ目だったんですね。慈恵医大出身の飯野富雄先生という方が病棟の責任者で、ある日「お前は美術学校を出ているそうだが、絵を描く人間が兵隊なんかやっているのはもったいない。絵を描いた方がいい」と言うんです。僕は「このまま戦友たちと戦場に行きたい」と渋ったんですが、先生は「こんな戦争は五年ともたない。だから家に帰って絵を描け。お前には絵を描く使命がある」とおっしゃって、数年は右腕が動かないという診断書を書いてくれました。

芳賀　すべてが絵を描くように動いていった……。

佐藤　飯野先生のおかげで運命が変わりました。しかし飯野先生自身はフィリピンで戦死されたんです。僕にとっては命の恩人、画家生命の恩人です。

芳賀　これまで絵を描き続けてこられた原点といえるような体験ですね。

佐藤　そう。でも、その前にどうしても絵を描いてやろうということはあったんです。実は、美術学校を出るとき教務課に何番で卒業か聞きに行ったら「学科の成績はまあまあだけど卒業制作はビリだよ」と言うんですよ。当時の画風と合わなかったり学生会の会長をしていたせいかもしれないけど、ビリはこたえました。「このやろう、俺は絵を描き続けてやろう、好きな絵を描いてやろう」と思いましたね。

芳賀　現在の昭和第一学園高校の先生になられたのはどういうきっかけで？

佐藤　軍隊から帰ってしばらく家で療養していたんだけど、若い男はみんな戦争にとられているでしょ。立川の昭和第一工業学校（現昭和第一学園高校）で夜間部の教師がいないから手伝いにこないかと声がかかり、昭和十八年一月からお世話になりました。当時の立川は陸軍の航空技術研究所や立川飛行機などがあり、夜間部には軍や会社で働きながら学ぶ優秀な生徒が日本中から集まって来たんです。そのうち昼間の先生も足りなくなり昼夜手伝いました。家は近いし独身でしたからね。結局それから昭和六十年まで、四十二年間勤めました。

芳賀　『戦時下の絵日誌』という画集にもなっている、色紙に墨を使った日常のスケッチを始めたのもこの頃ですね。

佐藤　戦争でふつうの絵を描ける状況じゃないし、飯野先生の言葉も身にしみていたからね。雑嚢にいつも色紙と矢立を入れておいて目に触れるものを何でも描きました。戦時中の思い出といえば、昭和十九年に生徒たちを連れて美ヶ原高原まで行ったことかな。文部省が中学生は修学旅行に行くなという指令を出したんだけど、こっちも若くて向こう気が強いから鉄砲を担がせて演習という名目で行ったんです。帰りは「夜行軍の演習だ」と中山道を丸子まで歩いて、みんなフラフラになったけど一生の思い出になったと言いますね。集団で山小屋に泊まり、山小屋に宿泊中の娘さんとロマンスみたいなのもあったみたいだし（笑）。戦争中に生徒たちにできたいいことはそれくらいですね。それから終戦まではひどくなる一方だったから。

芳賀　若者は戦争で死ぬことしか期待されていなかった時代ですから、それはうれしかったでしょう。戦後はいよいよ好きな絵を存分に描くことができるようになったんですか？

佐藤　戦争が終わってもしばらくは、日本も自分もどうなるか見当がつきませんでしたよ。学校も機械、電気、航空の三科のうち航空は禁止され、生徒は散っていくし復員で教師たちは帰ってくる。もうつぶれるんじゃないかという状態で、給料も分割です。よく実家の寺に集まって学校をどうしていこうかと話し合ったりしました。そうしたなかで絵を描いていた。最初は公募団体にも出品しましたけど次第に裏事情が見えてきて、こんなことじゃ自分の絵の人生がつぶれると、昭和三十二年に仲間と「知求会」というグループを作ったんです。このグループは四十年間続けて発展的に解消し、改めて「画友会」を結成しましたが、それぞれ異質なものを持っていたから続いたんだね。亡くなられましたが東京国立近代美術館時代からお世話になった河北倫明先生など評論家や学者の方たちに引き上げていただいたのもありがたかった。

芳賀　生涯のテーマになる水芭蕉と出会われるものも戦後すぐですね。

佐藤　絵描きとして海のものとも山のものともつかない時期でね。水芭蕉に出会わなかったら僕は富士山の絵描きになっていたかもしれない。毎年登って結婚式も富士山頂で挙げましたから。池田20世紀美術館の初代館長さんには「そうしていたら今頃蔵が建っていたね」と言われましたけど（笑）。水芭蕉を初めて見て、朝は童子のような冒しがたい美しさがあり、昼間は処女の肌の美しさ、夕方せせらぎに群生する情景は仏来迎図……どう描くかというより、感じたことが心に深く食い込んだといった方がいいですね。表現上は具象から形象的時期を経て抽象に入り、それを人間の心の問題としてつき詰めて現在の心象的水芭蕉になりましたけど、心象的抽象は造形的に無限な宇宙、つまり曼陀羅なんです。天と地、男と女などすべて対立しつつ生成し運動する宇宙が曼陀羅。すべてはその運動体の一部である。宇宙の運動の無尽蔵の線から求める一本を見つけて、線と色彩で描いた軌跡が僕の絵。「よく同じものを描き続けられますね」と言われるけど、宇宙に同じものなんかないんですよ。

芳賀　画家としての活動の一方では教師も続けられましたが、学校で制作なんかもできたんですか？

佐藤　とんでもない。学校で描いたのは戦時中の絵日誌だけですよ。絵は学校の仕事を終えて家に帰って一眠りして、夜中に描いたんです。全然苦にならなかった。あるとき校長に呼ばれて「佐藤君、君、絵描き屋さんを辞めて学校のために尽くさないか」と誘われたことがあったけど「まことに申し訳ありませんが、私はやっぱり一生絵を描かなきゃなりませんから、それだけはご遠慮申し上げます」と答えたら一言「わかった」と。それで最後まで一教師でしたけど、その渡辺良直校長は展覧会には必ず来てくださいました。学校では生徒の就職先の進路指導を長くして、ほとんどの生徒は僕が絵を描くなんて知らなかった。

芳賀　断られてそれを認めてくれた校長先生の度量も大きいなあ。しかし学校の仕事に専念しないかという誘いを断られたことといい、団体展を出て歩まれたことといい、やはり「僕の絵を生涯かけて描かなければならない」という使命感が画業を支えられたんじゃないですか。

佐藤　人間にはいくつかの運命のポイントがあって、僕の場合それがすべて絵を描く方向になった。美術学校に入ったのも、ビリで卒業したのも、軍隊から帰してもらったのも、一つの学校に長くいられたのも、河北倫明先生のような指導者がいたのも、すべて不思議な縁のように思えます。そして描いているすべては宇宙の運動体の一部であり、その軌跡ですからね。生きている限り描き続けるんでしょうね。

曙町	立川リージェントホテル	曙町2-11-7-2F	522-1133
	パティスリー バーゼル	曙町2-11-8	523-3746
	cafe バーゼル	曙町2-11-8-2F	523-3746
	Wine & Dining るもん	曙町2-12-13	527-3022
	ケンタッキーフライドチキン立川店	曙町2-12-16	528-2636
	住友銀行立川支店	曙町2-13-1	522-6171
	東京三菱銀行立川支店	曙町2-13-3	5244121
	立川郵便局 本庁舎	曙町2-14-36	524-8114
	カフェ アバン	曙町2-17-15-2F	527-4479
	トポス立川店	曙町2-18-18	525-0331
	三井石油フロンティア立川	曙町2-19-9	527-3943
	手打ちそば 閑	曙町2-25-3	525-1400
	三田花店 立川高島屋店	曙町2-39-3-1F	526-4167
	喫茶エミリーフローゲ立川高島屋店	曙町2-39-3-3F	526-9788
	立川高島屋ギフトサロン	曙町2-39-3-7F	525-2111
高松町	多摩画材（景品交換所）	高松町2-1-25	522-6031
	丸助青果店	高松町2-4-18	522-3542
	スーパー やなぎや	高松町2-5-17	522-4322
	肉の専門店 伊勢屋	高松町2-6-20	524-2734
	ケーキ&カフェ マリアン	高松町2-10-22	524-3912

えくてびあんの輪
人があって、街があります。
あなたがあって、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

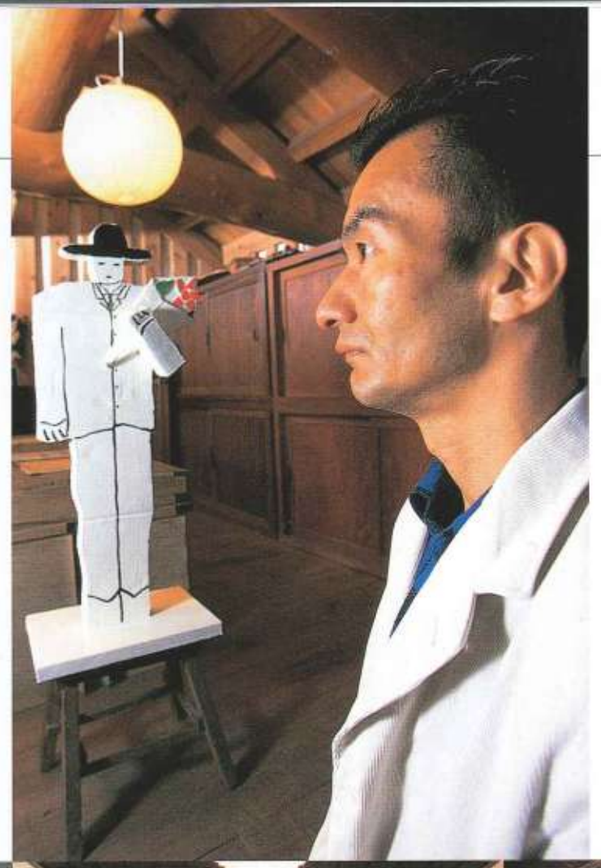
今月は曙町・高松町・若葉町・西砂町・栄町・幸町のお店です。

高松町	米穀・食料品 横町屋	高松町2-11-23	522-2609
	山梨中央銀行立川支店	高松町2-16-13	526-1571
	レストラン 榎	高松町2-22-2	526-2276
	cafe-resutaurant & bar TIP-TOP	高松町2-27-27	525-2030
	書籍・雑誌 フレンド書房	高松町3-18-2	527-1555
	HAIR MAKES たしろ	高松町3-26-16	525-2175
若葉町	ふとんの 青木寝商	若葉町1-8-1	536-6833
	美容室 リラ	若葉町1-11-1	536-3048
	みふじサイクル	若葉町1-12-4	536-7166
	紀の国屋立川支店	若葉町1-13-2	536-1604
	いなげや立川若葉町店	若葉町3-21-1	537-4119
西砂町	パティスリー ブルミエール	西砂町1-36-11	531-4835
	ぎゃらりー 繭	西砂町5-6-2	531-2392
栄町	多摩中央信用金庫栄町支店	栄町2-59-8	536-9711
	手打ちそば 佶更	栄町5-12-1	537-0991
	相模屋酒店	栄町5-61-8	536-2476
	メンズカット ヤザワ	栄町5-61-31	536-8738
	森田接骨院	栄町6-6-25	535-6240
幸町	いなげや立川幸町店	幸町1-23-6	537-1820
	お菓子処 花奴 すずかけ通り店	幸町3-17-3	536-8785

文化財の家 発アート

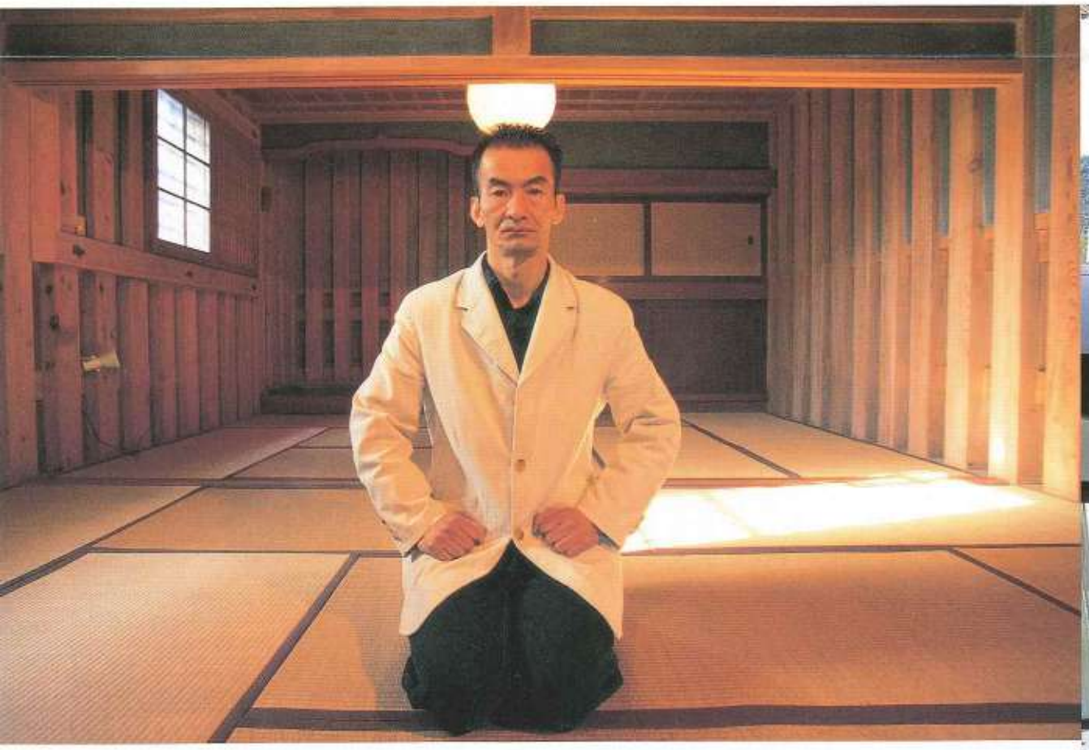
柏町・中野献一さんの芸術活動

このほど柏町の中野家が国の有形文化財として登録された。
かつて製粉用の篩（ふるい）絹を作っていた工場兼住宅の母屋と、
それより古く幕末から明治初め頃に建てられた金庫蔵である。
当主の中野献一さんはこの旧邸を維持しながら、自ら段ボールを使った立体作品を作り、
建物を公開したり金庫蔵を音楽や舞踊の発表に提供するなど、ここを芸術活動の拠点にしている。
絵の修業のため十代でフランスに渡り、15年間異郷でアイデンティティーのあり方に苦しんで帰国。
文化的「根」を失った日本にも違和感を感じながら、自己の立脚点として発見したのが、
蚕と共に生きた砂川の人々の記憶が染み込んだ実家だった。
古い建物とカラフルな中野さんの現代アートが不思議に調和し、２年後にはパリで個展も予定される。
立川の文化財の家は、アート発信の場として新たな命を得た。



中野さんの祖父が建てた母屋は建坪160坪の二階建て。段ボール・アート作品が迎える玄関の正面には、かつては上がりがまちと囲炉裏があった。二階は蚕室として使われ、忙しい時期は経営者も女工さんたちも一日14時間以上働いていたという。一帯の大地主だったが「すべてが蚕中心で食事も従業員と同じつつましいものでした。調度や書画骨董などの楽しみにも関心がなく、情熱のすべてを建物に注いだんでしょう」と中野さん。

段ボールを使うようになったのは１年ほど前から。それまで使っていたベニヤより早く出来るのと「最初から風化しているようなところ」が気に入っている。母屋の裏のアトリエで制作する作品はほとんどが人物や群像で男性はなぜかみんな帽子姿。人種や文化が交錯するパリで孤独だった頃から描いているテーマで、中野さんの自画像とも、髪の色がわからない普遍的な人間像、文化的「根」のない現代日本人のアイロニーともとれる。



金庫蔵の梁や桁には巨大な松の丸太材５本が使われ１階には床の間まである。２代目の当主は夜は鉄棒を持らにここに泊まったという。中里介山『大菩薩峠』に出てくる青梅の盗賊「裏宿の七兵衛」が２度襲って２度失敗したという言い伝えも。実際に外から鉄筋入りの壁の途中まで開けた穴や内部の刀傷など盗賊に襲われた痕跡が残る。

「60年ほど前ではないか」という祖父の代の頃の中野家。

表紙の人 伏見裕子さん（曙町）

八面六臂の活躍。本業は薬剤師で薬局を営むかたわら、ギャラリー『新紀元』を創設。同時に立川のクラシックシーンでは欠かせないホール『カンマーザール』の存在も大きい。また母校・立川高校に寄せる想いも深く卒業生を中心とした『紫芳会クラブ』のための『時代舎』の経営も十五年続けてきた。音楽の道では自ら合唱団の一員として活躍し、立川のみならず諸外国に赴くという熱意はいまだ衰えをみせない。「この立川で自分は何ができるのだろうか」と思考する、生粋の立川ッ子。
（於・昭和記念公園／撮影・細江英公）

木もれ日

今月の「えくてびあん'sVIEW」に登場いただいた柏町の中野献一さんのお宅は、かつて蚕を育て絹をつくった家です。大きな母屋は時代を経た木が磨き込まれ、おじゃましていてなんとも懐かしい気持ちになります。母屋の二階は蚕室になっていて、中野さんの幼い頃は二階だけでなく母屋全体が蚕に占領され、経営者であるご家族も従業員も一緒に働いたそうです▼鈴木功さんが連載してくださっている「たちかわ名木伝」で、今月は蚕業試験場跡の桑の木を紹介していただいています。立川の周辺一帯が桑畑の広がる一大養蚕地帯だった往時をしのばせる貴重な記念といえましょう▼八王子と横浜を結ぶJR横浜線がもともと生糸や絹製品を貿易港横浜に運ぶために計画されたように、絹は明治の文明開化から戦後の復興まで、日本の経済を支えた重要な輸出品でした。しかし、その絹を作る養蚕農家の労働は、春と初秋、晩秋の年3回、一日に何度も桑の葉を替えて蚕を育てる、それはそれは厳しいものだったそうです▼立川市内に桑畑を見ることはなくなりましたが、今でも砂川地域の古いお宅には養蚕の名残りが残っています。日本の近代化を蔭から支えた方たちのご苦労を思うと、ただただ頭が下がります。

【第三次えくてびあん同人】
編　集　大久保清志／小林康史／杉山清純／芳賀敏博／山田五郎
デザイン　池田隆男／AMNET DF
写　真　五来孝平／中村 伸

えくてびあん© 6月号
第18巻　通巻191号
平成12年6月1日発行
発　行　えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL. 042-528-0082 FAX. 042-528-0065
編集人　芳賀敏博
発行人　立井啓介
印　刷　(株)大廣社

無断転載を禁じます。

第7回えくてびあん杯争奪 立川ベーごま選手権

ついに大詰め。次回、いよいよ優勝決定戦！

いよいよ出揃ったベスト4の顔ぶれをご紹介しよう。まずは立川商工会議所会頭、岩崎泉選手。対するは錦町の中華料理店「五十番」シェフ、長島勇二選手。そして準決勝二組目は、曙町「木村橋蔵商店」店主の木村貴浩選手、立川市青少年健全育成連絡会会長、大根田和美選手の対戦。果たして決勝進出者は、そして初代ベーごまチャンピオンの栄冠に輝くのは誰か。次回はいよいよ準決勝、そして優勝決定戦の模様をお送りする。

真味百撰 ㊳

ジャパニーズトラットリア るもん

曙町2-12-13 1・2階 / 527-3022
平日 17:00～24:00、日・祭日 16:00～23:00 / 無休

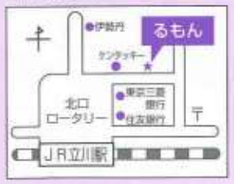
60種以上のワインとこだわりの有機野菜 カジュアルに楽しめる 和風イタリアンスタイル

立川駅北口のワインと料理の店として親しまれてきた「るもん」が約3カ月の改修を経て装いを一新した。

トラットリアとはイタリア語で、ワインと料理を出す居酒屋風の店のこと。白木の内装に調理場が見えるオープンキッチン、欧州のカフェを思わせる洒落た外装、お酒はワインとビール、カクテルのみと、店の内外に主張がある。料理は、特別に取り寄せている「ベビーリーフ」などの有機野菜、鹿児島産黒豚、地鶏……と素材にこだわり、持ち味を活かした約50種類。

だが料金や雰囲気はあくまでもカジュアル。料理はほとんどが1,000円以内。器や盛り付けも箸で食べるようにしてある。62種類あるボトルワインはフランス、イタリアを中心にチリ、アメリカなど2,200円から。手吹きガラスの気取らないグラスで飲むハウスワイン（グラス450円）が赤白各4種類、手作りデザートなど、女性やワイン初心者にもうれしい配慮。「もっと気楽にワインと料理を楽しんでもらいたい」という心意気を込めた和風イタリアンスタイルの提案だ。2階は少人数のパーティー向きの小部屋があり、パーティーメニューの相談にも応じている。

トマトがそのままご馳走になった「モッツアレラチーズとトマトのオーブン焼」（700円）。トマトの赤、チーズの白、バジルソースの緑の色彩も美しい。



ゴロさんの独断毒語 ⑪

デバラッセ

フランスの、ある格式を持ったレストランへ参りますと「デバラッセ」という行為を給仕長が行います。

オードブルからはじまって、メイン・ディッシュへと進み、好みのワインに舌鼓をうっていると、給仕長がどこからともなくやって来て、――今日のパイ包みは、いかがでしたか？　などと声を掛けてくる。客は料理の感想やら、ワインの風味やらを語っているうちに、皿がさげられて、塩、胡椒などテーブルの上にあるもの一切が消えて、テーブル・クロスの上に散らかったパン屑が専用のローラーのようなもので綺麗に拭われるのです。

この状態を「デバラッセ」と云うのですね。

そこへ別のメニューが配られます。さあ、これから「第二幕」のはじまりです。いわゆるデザート・コースに入るわけです。

チーズは指定しなくても、ワゴンに乗せられてやってきますから、好きなものを選んで小分けにしてもらいます。何種類食べても値段に変化はありません。この時、もう一度、ワインの飲み直しをする人がほとんどで、彼の国では実によくワインを飲みます。

ケーキやアイスクリームを食べてコーヒーを飲み、ようやく食事が了るのですが、そのあとにまた、コニャックなどを注文するひとがいて裕に二時間はテーブルの饗宴を愉しんでいるのです。

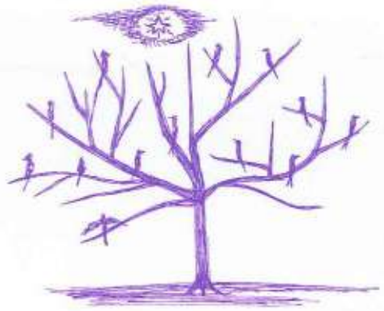


イラスト 綾 幸子

第一幕と第二幕を合わせると、日本流の倍は愉しんでいるように思えます。さて、一幕から二幕へ移る時の「デバラッセ」という、あの妙に贅沢な瞬間が忘れられません。給仕長の鮮やかな手捌きもあって、どことなく劇場の登場人物という感じさえ抱かせます。

この間、昔、パリに住んでいた友人がこんなことを云っておりました。――おれも近々、デバラッセに入ろうかと思って……。

父親を亡くして、老いた母親をひとりにしておくわけにはいかないので、秋田の田舎に帰ろうかと思っているというのです。彼はもの書きですので、住む場所を選ぶ必要はあまりありません。電話もファクシミリもコンピューターもある世の中ですから、原稿は出版社に電送すれば済むことです。――羨ましいなあ。

私がそういうと彼は、――傍目にはそう見えるらしいけど、こんな騒々しい東京でも、いざ「デバラッセ」をする段になるとどうにも落ち着かなくてな。まあ、ときどき「東京旅行」を愉しみにして田舎暮らしに踏切ろうかと思っているところなんだけどね。

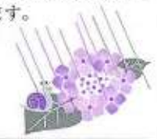
私はパリで幾度か出会った「デバラッセ」の鮮やかな給仕長の姿を思い浮かべておりました。あれはテーブルの上だから、あんなに鮮やかに出来ることで「人生」のデバラッセは、そう簡単にはいかないのだろうなあ。

（やまだごらう・詩人）

地潤す雨

紫陽花の頃。人間にとって鬱陶しい天気も植物には命をはぐくむ恵み。雨も優しく感じられます。

スカイパーフェクTV216ch、マイ・テレビ84chでご覧いただける真如苑の番組「常楽我浄（じょうらくがじょう）」は、いきいきと生きる人たちの姿や真如苑の活動を多角的にご紹介しています。



放送時間
土　曜　午前9時～9時15分
　　午後7時15分～7時30分
再放送　火曜午前9時～9時15分
　　午後7時45分～8時
放送時間は予告なく変更する場合がございます。

立川に育てられて六十四年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel. 527-0111(代)

首都圏に拡がるとみん銀行

暮らしに、事業にお役に立つよう努力しています。

とみん銀行 東京都民銀行

デジタルえほん
メモリーブックにどうぞ…

ミッキーやキティちゃんと一緒に…!!
あなたの写真と名前が絵本の中に入ります。

PLANNING・DESIGN・PROCESS・PRINTING
株式会社 大廣社 ☎042-527-1911
〒190-0022 東京都立川市錦町5-17-13
FAX.527-1949
E-mail JD05215@nifty.ne.jp

赤川作品十二撰 11

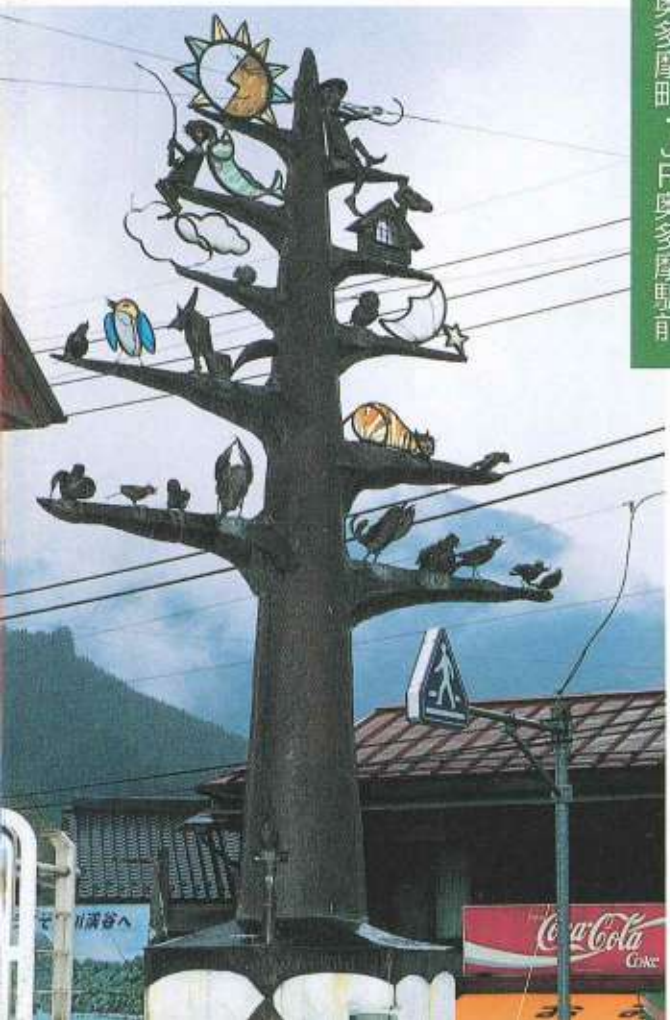
「森と泉と生命（いのち）の木」

奥多摩町・JR奥多摩駅前

山深い清流と渓谷の郷、奥多摩。青梅線の終点駅、奥多摩駅のすぐ前にこの作品は設置されています。

奥多摩の木、スギをモチーフにした大きな木に寄り添う人や動物たちは、大自然とともに生きるこの町の人々の姿。太陽や月、雲は、私たちに四季の素晴らしさを運んでくれる時の流れを象徴しています。当時のスタッフ総動員で制作に打ち込みました。

駅前という分かりやすい場所に置かれているにも関わらず、最も「気づかなかった」と言われる作品です。彫刻として存在感が希薄だとまで言う者もいますが、僕としては「わが意を得たり」。あくまでも奥多摩の大自然との調和をめざして造ったものですから、景色に溶け込んで、パッと見て気づかないくらいが丁度いいのです。

この雄大な自然のパノラマには、われわれは勝てっこないのですから。

（1993年制作・赤川政由）